

氏 名	永田 真紀 (カギマキ)		
学位の種類	博士(芸術)		
学位記番号	甲第 32 号		
学位授与日	平成 23 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	天橋立図の研究 —名所風景とその絵画化における諸問題—		
審査委員	主査 教授	島 尾	新
	副査 教授	中 村	隆 夫
	副査 京都国立博物館 学芸部 連携協力室長		
		山 下	善 也

内 容 の 要 旨

本論文では、天橋立図屏風を中心として、名所を描く絵画について論じた。このような絵画については、「名所絵」から「真景図」に至るまでの名付けの問題、象徴的な表現から精緻な写生までの風景の捉え方の問題など、振幅が大きく研究の視線も錯綜している。

そこで第一章では「名所と絵画の諸問題」として、名所を描く絵画についての用語上の問題、また描かれた風景とその名付けの関係などを確認した。名所を描く絵画には、実景に基づかない象徴的なものから、写生による極めて写実的なものまでがあるが、「名所絵」「真景図」などの名称は、それらを横断しておりその規定性は弱い。また類似の風景が描かれたものに対して、様々なコンテキストから異なった名称が与えられることもある。そのような状態のなかで、用語の問題に拘わらず、できるだけ造形表現自体から立ち上げた、明快な方法を取ることが必要に思われた。

これに基づいて第二章「Y家本「天橋立図屏風についての一考察」では、ケーススタディとして、極めて豊かなモチーフをもつ一双の天橋立図屏風を取り上げ、描かれたモチーフ及びそれらが形成する景観と、実際の土地およびそれに纏わる物語との対応関係を、出来る限り徹底的に探求した。従来、描かれたものに片寄りがちだった分析を反省し、描かれないものにも配慮した。その結果、画面へのモチーフの導入には、他のモチーフからのイメージ連鎖によると思われるものが見られた。また多彩な風俗描写を含めて装飾的かつ平面的に見える画面は、かなり正確な土地の情報を基礎に描かれたものと想定され、画師に実景の感覚があった可能性を考えさせた。

第三章「天橋立図屏風の諸相」では、このY家本を天橋立図屏風全体のなかに位置づけるため、現存する約五十点の作品について、構図・モチーフなどを詳細に比較して分類と特徴の抽出を試みた。その結果、これらの屏風は六つのタイプに分類されることが分かり、それぞれのタイプが何を指して描かれたのか、という大きな意味でのテーマを推定することができた。Y家本については、これが天橋立図屏風のなかでも、極めて優れた作品であり、一群の作品のなかで一つの型を提供した重要なものであることが明らかとなった。

第四章「和歌浦図屏風に見る土地と絵画の関係」では、景観構成の基本が長いあいだ変化しなかった天橋立に対して、近世に大きな変化を遂げた和歌浦を描いた屏風を取り上げた。和歌浦は玉津島を有す古来の歌枕であるが、近世初期に浅野家による復興があり、さらに徳川家が入って東照宮などを建立して、名所の景観を一変させてしまう。これを反映して和歌浦図屏風の図様も、中世のイメージを残すものから、徳川が目指したイメージを極めて明確に示すもの、さらには東照宮を厳島神社と対応させるものなどが生まれる。これらの分析を通じて、絵画と土地とのインタラクティブな関係が確認された。

第五章「司馬江漢の富士図と雪舟評」では、やや視点を変えて、司馬江漢が久能山からの眺めた富士を描く作品を取り上げた。これには、雪舟が描いた富士図と同じ視点から見た、との江漢の識語があり、従来は雪舟を「無知なる者」と否定していると解釈されていた。しかしこれは、雪舟の富士図を認めその権威を利用していると考えられる。これを含めて、江漢が狩野派などの古画を全面的に否定しているといえるのか、また富士の表現においても、蘭画と探幽画・雪舟画とを単純に対照させることができるのか、などについて論じた。

第六章「初代広重の天橋立図」では、エピローグとして、歌川広重の天橋立図を取り上げた。広重の作品では、橋立の砂嘴の特徴ある形態が切り出され、強調されて表現されている。第二・三章で取り上げたような、この地域全体を名所として描き出すというよりは、橋立自体が造形の素材となっているといえる。この傾向と橋立のもつ霊性が絡み合いながら、近代の天橋立図へと繋がってゆくように思われた。

全体として、名所を描いた絵画の孕む問題の全体について触れることは出来ず、オムニバスのなものにはなったが、このテーマを追求する上での基礎作業とは成り得たと考える。

審 査 結 果 の 要 旨

本論文は、天橋立図を中心に、日本の名所風景を描いた絵画を論じたものである。その問題意識を語るのが、第一章の「名所と絵画の諸問題」である。まず「名所絵」についての基本的な事項を確認した上で、名所を描く絵画についての「名所風俗図」「名所遊楽図」「地方名所図」など、微妙にニュアンスと視点の異なる名付けを概観し、当該の作品群についての分析者側の枠組みが錯綜していること、本来複合的な要素をもつ名所風景を

切り分けることの問題点などが指摘される。さらに名所絵が含まれる風景を描く絵画へと視野を広げ、似たような風景表現に対しても、詩文や題名など外部のテキストなどの干渉によって、異なった名付けとイメージ形成が行われることが指摘される。総じて名付けや分類が、造形のものから立ち上げられていない場合のあることが問題であり、取られるべき方法として、まずは描かれた世界を構成する事物を愚直に確認することが提起され、そのケーススタディとしてY家本の「天橋立図屏風」が取り上げられる。

第二章「Y家本「天橋立図屏風」についての一考察」と第三章「天橋立図屏風の諸相」ではその実践として、画中の景が一つ一つ確認され、それらが実際の土地やそれについての物語と突き合わせられてゆく。その結果、単なる樹木と見えるものが、土地の人々にとってはよく知られたポイントであったり、さりげなく描き込まれた地元の民の生活が画中を巡る旅の重要な要素となっていることなどが明らかにされる。

さらに第三章では、現存する二十四の天橋立図に描かれたモチーフと表現上の特徴が詳細に比較される。比較項目は、前章で分析したY家本に見られたものを基本に、橋立を見る方角・主要な名所のみならず「牛と門」「塩づくり」などの細かなモチーフまで三十五に涉っており、それを一覧できるようにした表は有用な基礎資料となっている。その分析の結果、天橋立図屏風は大まかには六つの群とその他へと分類し得ることが示され、また、一見したところでは装飾的要素が強いY家本が、天橋立地域についての情報を豊富に含んでおり、画師が土地について精通していたであろうこと、また造形的にもこの土地の特徴をよく整理して図様化していること、したがって天橋立図屏風の典型の一つを作り上げたものとして高く評価できることが指摘される。

このような詳細な分析は「天橋立図屏風」については未だになされておらず、またいわゆる名所一智恩寺・成相寺・籠神社などの有名寺社や石清水などの「名あるところ」一に限られがちだった分析を、画面全体に及ぼしてその構造を論じたことは新たな分析方法として、またこの種の絵画の観られ方のシミュレーションとして意義がある。

第四章「和歌浦図屏風に見る土地と絵画の関係」では、当該の屏風を題材に、土地とそれを描く絵画、現実の景観とそのイメージ化とのインタラクティブな関係が論じられる。和歌浦は古来の歌枕であり、その名所イメージは玉津島と紀三井寺を中心とするものだったが、江戸時代に徳川家が入って東照宮などが建立され、領家の権威と支配を象徴するように土地景観が再編されてゆく。そのなかで「和歌浦図屏風」にもいくつかのヴァージョンが生まれてゆくのだが、そこに描かれた景観は、ただ土地の変化を後追いするだけではなく、徳川家の求めたイメージを極めて鮮明に図像化したものも見られる。また巖島図と組み合わせた一双形式については、徳川の前にこの地に居て安芸へ移った浅野家との関係が示唆される。土地からそのイメージへとという一方向の見方に陥りがちななかで、このような土地と絵画のインタラクティブな関係に着目した点は評価でき、それが逆に風景に変化の少ない天橋立を浮かび上がらせることにもなっている。画中の景の同定も、前章と同様に現地調査に基づいて詳細になされており、造形論のみならず風景論・景観論としても

展開できる要素を持たせている。

第五章「司馬江漢の富士図と雪舟評」では、江漢が矢部から見た富士を描いた「駿州矢部富士山図」が取り上げられ、司馬江漢が、この絵の識語で雪舟を「無知なる者」と否定したという通説に疑問を呈すことから始めて、実景を描く絵画についてのいくつかの本質的な問題が論じられる。江漢は長崎への旅の途次に、雪舟が「富士・三保・清見寺図」を描いた視点を見出して「駿州矢部富士山図」を描くのだが、その識語に込められたのは雪舟の否定ではなく、むしろその視点を発見した喜びであり、江漢は雪舟の権威を利用しつつ自らの絵の価値を高めようとしたと解釈する。やはり痛烈な批判の対象とされたとされる狩野探幽筆の富士についても、否定されているのは実景を見ないで描く狩野派のエピゴーネンたちであり、必ずしも探幽自身が対象になっているとはいえないとの可能性が示される。それらを論じるなかで、江漢の議論が、どこまで絵画そのものから立ち上げられたものであるのか、雪舟や探幽といったビッグネームの権威の干渉、蘭画・写生を主張する江漢にあっても見たままを描いたわけではなく、画面を整える造形的な作業を行っていることなど、実景を描く絵画の多彩な問題が語られる。大きな枠組みでの議論ではないが、第一章で提起した問題への、ひとつの見通しを述べたものといえる。

第六章「初代広重の天橋立図」は、長めのエピローグといった風のものである。広重の持っていた橋立イメージの構成要素を、彼の作品の分析を通じて推定しながら、その図様に見られる独特のアレンジ感覚が論じられる。広重の興味は、様々な物語に取り巻かれた名所としての天橋立から、次第に橋立そのもの、純粋にヴィジュアルな風景としての橋立に集中してゆくという。近代に入ると名所を描く風景画や風景写真から、Y家本などに描かれていた、宴や参詣また塩汲などの多彩な人々の営為は消えてゆき、描かれるにしても象徴的なものが多くなる。本章はエピローグとして、このような傾向への移行を広重に象徴させ、最後には川端龍子や麻田鷹司などの作品が引かれて橋立のイメージ史の結びとされている。

総じて天橋立図を縦軸に、和歌浦図・巖島図などを横軸として、名所を描く絵画についての極めて多岐に渉る問題論じられている。オムニバスのなところはあがるが、天橋立図屏風の詳細な図様比較など、従来なされていなかった分析を行って後の研究の基礎を提供している点、また名所を描く絵画についての、重要かつ本質的な問題提起に富んでいる点は十分に評価できから、学位を授与するに相応しいものと結論した。